道頓堀のばあちゃんとナイカワンガのじいちゃん

鹿児島大学法文学部後期博士課程
小川領一

10 月 30 日，祖母が 88 歳で他界した。祖母が晩年どのような人々と関わりを持っていたか，通夜，葬式当等，一連の準備を通じて見えてきたものがある。一方，昨年と今回のフィジーの調査から，ナイカワンガ集落の長老の長，ラトゥと住民の関係も見えてきた。同じ「高齢者」でありながら，この二人がどのような人間関係の中で生活を行っているか，コミュニティの観点から比較してみたい。

半分母親的な存在に近かった祖母の危篤の連絡が飛び込んできたのは 10 月 28 日だった。すぐに祖母が住む道頓堀に駆けつけた。祖母は病院にいたが，昏睡状態だった。生前，最後に会ったのが，今年の 8 月。私の二人の子供たちを正確に認識し，折り紙やお手玉をして遊んでいたが，体の衰えは目に見え，歩くことすら困難だった。28 日夜，ポータブルトイレにうまく座ることができず骨折し，その痛みが引き金となって血圧が上がり，耐え切れなくなった脳内の血管が切れ，脳内出血を起こしたのだった。30 日の朝には眠るように息を引き取った。その後葬儀の準備に走り回るのだが，どのあたりまで葬儀への出席を依頼するかが問題だった。なぜならば，生前，祖母の意向で「葬式はこれだけの金額でやってほしい」といって残していった額が 50 万円。とにかく「こじんまりとした葬式」を望んでいた。ある葬儀会社のデータによると飲食費まで含めた平均の葬儀費用は約 180 万円前後だそうだ。祖母から預かった金額では無理があるのは当然だが，故人の意思は尊重せざるを得ない。そうなると，来ていただく人を選別せざるを得なかった。とにかく，思い当たる付き合いのある人を思い出し，書き出してみる。地縁，血縁関係を書き出してみてあらため今の日本が抱える問題があぶりだされてきた。地縁の代表格，町内会との付き合いがほとんどなかった。祖母が住んでいたのは道頓堀。土地バブルのころ，この近辺は土地価格が急騰し，住民の多くがこの地を去った。あれから 20 年，何とか残った人たちは高齢化で足腰が弱くなり，外に出歩くことがなくなった。町内会自体はまだ存在するが，活動には参加することがなく，結果的に町内会とは疎遠になっていた。血縁も希薄になっている。もともと祖母は大阪の和泉の出身で，その地域には多くの親戚がいる，と私は思っていた。しかし，連絡の取れるのは祖母と同じ世代で，その次の世代がどのように生活をしているのか，知る余地もない。そういう私も鹿児島で生活をしているが，それを同じ世代の「親戚」に伝えていない。このように作業をしていると，参列していただこうと考える人数も限られてきた。なんとなく祖母の晩年が寂しいものであったように思えた。しかし，そうでもなかったと分かったのは，ホームヘルパーの方々とお会いしたときである。恥ずかしい話ではあるが，私は祖母がどのようなサービスを受けていたのかまったく知らない

し，彼女たちと会うのも初めてだった。話を聞くと，週に数回はデイサービスに出かけ，施設で風呂に入れてもらい，レクレーションを楽しんで帰ってくるとのことだった。頭が下がる思いである。彼女たちは，「焼香だけさせてください」とのことだった。結局のところ，晩年は地縁，血縁から離れ，ヘルパーに助けられて晩年をすごしていた構図が見えてきた。祖母が「こじんまり」というのは，それを認識していたからだろうか。

一方，フィジー・ナイカワンガのラトゥーはＸＸ才である。フィジーの平均年齢からすれば，もういつ亡くなってもおかしくない。そのためか，今回の調査では，トラニコロがラトゥーの「死」について何度か口にした。例えば，彼は牛を飼っているのだが，ラトゥーの葬式費用のためだという。また，「ラトゥがなくなったらこのほら貝で住民にその視を伝えるんだ」なんてことを言っていた。昨年の調査ではそんなことは全く触れなかったのだが・・・。そんな心配をよそに，ラトゥーは昨年の調査時と比べても全く衰えた気配もなく，元気そのものである。ナイカワンガにおけるラトゥーの主な仕事は，コミュニティのチーフとしてその威厳を示しつつ，コミュニティ内の人々の意見をまとめていくことである。コミュニティ内の行政的な仕事はトラニコロが負うが，その内容については，ラトゥーの承認が必要である。例えば，今回同席したコミュニティの全体会議では，電気を引くことについて，その費用負担について取りまとめていた。彼のプライベートな面では，10 人以上の孫に日々囲まれ，食事も家族そろって取っている。特に今年は「ベビーブーム」だったようで，ラトゥー一族にも新しい男の子「セメッサ」が誕生していた。

ナイカワンガのコミュニティは，血縁と地縁のふたつの要素で形成されている。血縁関係は大きく分けてふたつの家系（マタンガリ）が存在する。ひとつはラトゥー一族，もうひとつは 100 年ほど前，ラトゥー一族の「召使」として他の島から移住した一族である。現在，ラトゥー一族はふたつに分かれ，実際は 3 つのマタンガリが存在するが，ラトゥー一族と召使一族のふたつの家系は時の流れとともに「混血」が進みつつある。この混血を促したのは「地縁」である。地縁とは，土地を媒体として成立している関係であり，土地とは，「共同体」成立の主要な物質的基盤をなすものである（大塚 2000）。つまり，ナイカワンガは，土地という要素により，その人間関係が強く結ばれているのである。そのためか，100 以上あるといわれている「コミュニティ」の定義のほとんどに「地縁」が含まれている。

そのコミュニティ内部では，相互扶助の関係が成立している。トラニコロの夫人，ロマとお茶を飲みながら話をした時，「コミュニティで困っている人がいれば助け合うのよ。食べ物も水も，病気になったときもね。」といっていた。確かに，ナイカワンガでは，家を作るときも，農作業も漁業も，そこから得た品物をマーケットに運ぶときも「相互扶助」で行っている。ナイカワンガを見ていると，「コミュニティ」には「地縁・血縁」をベースにした「相互扶助」がひとつの要素となっていることが観察できる。

そこで，祖母の晩年の生活環境を考えてみたい。前述のとおりコミュニティの定義では，「地縁」「血縁」を含めるものが多く存在する。それらの定義を拠り所にすると，町内会との関わりもほとんど持たず，親戚付き合いもほとんど無かった祖母は，どこのコミュニティにも属していないことになる。しかし，祖母は晩年，ヘルパーを中心にした人間関係に属していたことになる。ヘルパーの存在は相互扶助ではなく経済行為を含めた「一方扶助」であり，血縁関係も無く，「地縁」という要素も非常に弱い。しかし，祖母がそこに愛着を感じていたのは確かであり，心の拠り所であったには違いない。これを「祖母のコミュニティ」と考えるのは間違いだろうか。

祖母を取り巻く様な人間関係は，日本では最近多く見られる。このような人間関係は，「地縁」「血縁」から超えたところで多く成立している。特に最近は，「IT」を通じて人間関係をも形成している。「コミュニティ」の概念が変わりつつあるのだろうか，それともナイカワンガとのような従来型のコミュニティとは状況とはまったく別の人間関係を形成しようとしているのだろうか。祖母の死がきっかけで考えることになった。

生前祖母が世話になったヘルパーさんたちには葬儀には一番前に座ってもらおうか，そんなことも考えている。